六月におそくうへたるは、八九月に實なる、平地よりひきくふかくしてうへ、漸々に糞土を置くべし、地高ければ、水を澆ぎ糞を敷に、ながれてとゞまらず、後まで少くぼめるが、糞水たまりてよし、灰糞水小便に宜し、苗の時蠹好て食す、毎朝ほり去べし、或他草の葉を根に置て、翌朝きりむしの有無を試て、有時は掘去べし、或云、豇豆をうふるに、區を作事方三四尺、あなをほり糞土をみて中を空くし、まはりに圓くうへまはし、蔓を生じて竹をまるく立べし、風にたをれず、苗長ぜざる間は、きり虫食しやすし、虫多きには、紙或竹皮しらんの葉を、三寸ばかりに切て、それを以莖をまけば食せず、蔓長じて後末を早くつみ、されば實多し、

〔農業全書二十六樹藝〕豇豆一名蜂雙、莢心雙生、紅色居多、故名、李時珍曰、開花結莢、必兩兩並垂、有習坎之義、其子微曲、如腎形、所謂豆爲腎穀、宜以此當之、

穀雨後種、六月收子、收來便種再生、八月又收子、一年兩熟、

〔玉露叢〕一寛文五年正月ニ、將軍家ノ仰出シ、

一大角豆　右同斷○六月ヨリ

〔毛吹草三〕河内　小角豆廿五サヤ、ゲトモ云、垣ニ生ナガラサヤ共ニ干置テ、後是ヲ煮テ用ニ、サヤ生ノ如ト云、

〔雍州府志六土產〕角豆　白赤角豆實、日乾而用之、是稱實角豆、在三條南大宮、延喜式載山城國交易雜物、大角豆六石云云、

角豆幷刀豆　處々有之、然角豆東河原之產爲佳、刀豆九條邊所種特爲良、

〔倭名類聚抄十七豆〕野豆　本草疏云、豌豆豌音於丸反一名野豆、和名乃○良○末○女○

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕本草和名云、小豆一名荅、頭出、豌豆、江豆、野豆、不載出典、按伊呂波字類抄載本草和名云、頭豆、豌豆、江豆、野豆、豐、以上五名出疏文、則知今本本草和名不載出典者、傳寫脫文、蓋源君從本草和名引之、所見本未誤脫也、然頭豆以下皆以類並舉者、故不云一名、源君以野豆爲豌豆一名誤、按廣雅、蹕豆豌豆蹈豆也、李時珍曰、豌豆種出西胡、八九月下種、苗生柔弱如蔓、有鬚葉似

豌豆